

破壊の繭と行く旅路

月侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元日本人であるクリユザは、15歳の遅い旅立ちの日を迎えた。ポケモン世界だし色々行きたいなーとなワクワクしながら研究所のある町に向かう途中、ひよんなことからあるポケモンを助けた。すると、そのポケモンはクリユザについてくるようになってしまった。仕方がないので、クリユザはそのポケモンを相棒として様々な場所を旅することにした。

そのポケモン——はかいポケモン・イベルタルと共に。

・ノリと勢いと書き散らしの小説です。オリジナル地方やオリキャラもいますが、既存の地方にも行きます。

・アニメとゲームを足して2より小さい何かで割ってます。ポケスぺ？ポケモンBURST？あんまり読んだことないんでエッセンスレベルですね……

目次

プロローグ	1
フリーダム博士	7
街を発つ	12

プロローグ

ポケットモンスター、縮めてポケモン。この星に住む、不思議なふしぎな生き物。

空に、海に、森に、山に、時には宇宙に。様々な場所に住む。

OK?ここまではだいたい皆知ってると思う。

そして自分ことクリユザは、ニホン地方ヒョウゴシティ……じゃなく、エナム地方ロットタウン出身の15歳。一応、ポケモントレーナーだ。

何が言いたいか?まあ、その……なんだ。

どうも、ポケモン世界に転生しちゃったらしいね!こんちくしょうが!



元々俺は、イラストレーターだった。ソシヤゲとかラノベとか広告とかの絵の仕事をしていた。

趣味はゲームで、その中の一環でポケットモンスターシリーズもやっていた。メインのもそうだが、不思議のダンジョン、レンジャー、トローゼetc. つまり立派なポケモンオタクだった。

そんなわけで、その日は確か古本屋に昔のシリーズの攻略本を探しに行った帰りだった気がする。どうやって死んだかはよく分からなけれど、多分歩道橋かなんかから足を滑らしたのだろう。よく階段で転けてたし。

それで、目を覚ましたら、ロットタウンに住む一般家庭の子になっていたという訳だ。訳が分からない?俺も未だに分からないよ。

転生を自覚してからマズ思い出したのは、「エナム地方、ロットタウン」なんて本編外伝どれかにあったっけ?ということ。ちなみに無かった。まあ描写されてないけど存在する地方なんだろうな。

でもって、俺はロットタウンのちよつと裕福な一般家庭で育った。4人と2匹家族で、父さんはホテルマン、母さんはカフェの店長、妹は現在7歳で小学生。それから、父さんの昔からの友人であるイエツサンと、母さんの姉妹みたいなものであるチルタリス。

そんな家族なもんで、俺は将来どーしよっかなー、ポケモントレナーならろっかなー、と、呑気に考えたりしていた。10歳になったら旅でもするかー!とか父さんに言ったら、『せめて中学校には行け』と言われてしまったので、中学校に行つてからの旅立ちとなった。つまり、周囲の友人よりも遅く旅が始まることになってしまったということだ。

まあ、父さんと母さんの心配もよく分かったし、イエッサンと母さんが用意してくれる弁当を楽しみに、今日までなんとか(赤点ギリギリなのからは目を背けといて)生きてきた。

そういう訳で、今日が旅立ちの日となる。

お気に入りのロングコートを羽織つて、リュックサックを背負い、靴を履く。

「クリュザ、きちんとワールシティの研究所まで行ける?大丈夫?ワルトちゃんがついてくけど心配で……」

「大丈夫だつて。通る森もよく遊びに行つてたところだしさ」

「本当だな?きちんと定期的に連絡は入れるんだぞ?!」

「お土産まってるねー!」

「分かつてるつて」

ロツトタウンには、マサラタウンのように研究所がある訳では無い。最初のポケモンを貰いに行くなら、隣町であるワールシティまで行かなければならない。ただ、ロツトタウンとワールシティの間には、黒い森という森がある。ヤグルマの森みたいな感じの森だ。

そこを越えるために、母さんのチルタリスのワルトがワールシティまでついてきてくれる。黒い森はむしタイプとくさタイプのポケモンが主に生息しているのだけど、道を間違えて奥に行けば、ペンドラーに出くわす可能性がある。そのためにもワルトが来てくれる。

「お兄ちゃん森で迷っちゃダメだよ?ほーこーおんちなんだもん」

「大丈夫だつてばーそんじゃ、いつてきまーす!」

家族に見送られながら、住み慣れた家を飛び出した。まずはワールシティまで行かないとな……



森を歩く。一応舗装された道があり、そこに沿って進む。左右には草むらがあるが、ワルトがいるとはいえあまり踏み入れない方がいい。

ワルトは少し後ろを飛びながらついてきてくれる。

「クリユザー！どこ行くんだー？」

「うわっ?!と、ロベリアさんか……」

左側の草むらから声をかけられ振り向くと、三ツ首のドラゴンポケモンを連れた青髪の男性が手を振っていた。

ポケモンレンジャーのロベリアさん。この辺り担当らしくて、昔からお世話になっている人。俺にとって兄みたいな存在だ。父さんの友人の子だとかなんとか。

「いやー、今日やっと旅の許可が出て。ワールシティにポケモン貰いに行くところなんですよ」

「それで、ワルトちゃんがそこまでの護衛ってわけだね。うんうん、理解解！」

ロベリアさんは、そう朗らかな笑顔で頷いた。ロベリアさんの相棒である三ツ首のドラゴンポケモン……サザンドラのバルドは、ワルトとなにやら話し(?)ている。

「ニシキギ博士のところに行くんだね。今日はペンドラー達も大人しかったし、最悪ワルトちゃんに歌ってもらったらいよいよ」

「ありがとうございます。そういや、ロベリアさんはどうして森に？いつもは湖の方にいますよね？」

ロベリアさんの管轄はこの辺り一帯だけど、メインは反対側にある湖……かがみの湖とかいう湖らしいって前に聞いた。だから、こっちに居るのはちよつと珍しい。

ロベリアさんは答えた。

「それがさ、昨晚何かがこの森に墜落したから調べて来いって言われちゃってさ」

「ほへー」

確かに何か振動があった気がするけど、本当に何か落ちてたのか。

とか呑気に思ってみる。

「まあ、気をつけてね?」

「はい」

そうしてロベリアさんに手を振って、歩みを進めた。

◆◆

「まよった」

ここどこ?というのが率直な感想だ。

ロベリアさんと別れてから数十分。道から逸れて、草むらの中にいた。コートが丈夫なのが幸いして、特に怪我はない。

いや、原因は分かっている。「あつ!ヤナップ!」と思って近づいて、小さい崖から転げ落ちて、元の道に戻ろうとして多分正反対の方向に行ったんだと思う。ワルトともはぐれてしまった。どうして。

現在の持ち物は、キャンプ道具と拾ったモンスターボールが5つ、さつき通りすがりの店員さんに貰ったまんたんのくすりがひとつ、その他諸々。アナヌケノヒモ?ナンノコトデスカネ?

タウンマップもなければ、そらをとぶを覚えたポケモンがいる訳でもない。それどころか、手持ちはゼロ。大ピンチだ。

幸いにも、さつき遠くで昼寝してるバタフリーを見た以外はポケモンは見かけていない。隠れているだけな気もするけど……いや、やけにポケモンいないな?

止まっても仕方がないので、進む。足元だけは気をつけて。

すると、開けた場所へと出てきた。ヤグルマの森にあった『しきくのはら』みたいに、突然開けた場所に出た。

光がさしていて、一見するととても綺麗な場所だった。しかし、その中に一つ異様な部分があった。

開けたその空間の真ん中に、大きなポケモンが倒れていた。

赤と黒の色を持ったポケモン。全体的なシルエットは鳥ポケモンに近い。傷だらけでうなだれている。

「あれは……」

「脳内のポケモン凶鑑を調べる。鳥ポケモンで、赤くて黒く、大きい。数秒とかからなかった。分かった、あのポケモンは、確か。」

「……イベルタル?」

「はかいポケモン、イベルタル。カロス地方の伝説のポケモンで、その命が尽きる時に、周囲のあらゆる命を吸い尽くして繭となり眠りにつくというポケモン。」

「それが、どうしてこんな所に?しかも、とても傷ついている。」

「痛みからかは知らないが、こちらに気がついて睨みつけてくるだけは何もしてこない。」

「どういうこった」

「分からん。わからんオブわからんけど、ひとつ分かることはある。ロベリアさんの言ってた『墜落したもの』はおそらくこのイベルタルだ。」

「どーするべきか、と思いつつも、このままほおっておくわけにもいかない。寿命尽きて命吸われるとかやだし、なんなら俺にはイベルタルをこのままにしてどっかに行く度胸なんぞない。」

「……あー、えーっと、イベルタル?」

「幸い、手元には貰ったまんたんのくすりがある。傷を治すだけなら、なんとかなる。」

「手当をしようと一歩踏み出す。相変わらず睨みつけてくるだけだ。攻撃してくる気配は無い。」

「手当、させて貰うぞ?染みるけど我慢、OK?」

「変な文になりつつ、イベルタルに言ってみると、イベルタルは(なんだこいつ)とでも言わん感じに僅かに首を捻った。」

「まんたんのくすりの栓を開けて、傷に吹きかける。しみたのか、イベルタルは少し身をよじった。」

「くすりの効果は凄く、細かい傷ならすぐに綺麗になっていく。大きな傷もふさがって行っている。凄い。これ、かいふくのくすりだったらもつとやべーんだらうな。」

数分で、一通り手当ができた。その辺にあったオレンのみとラムのみをもいで差し出すと警戒していたが、俺がひと口齧ると警戒せずに食べてくれた。「傷ついたポケモンにはオレンとラム！オボンがあればなおよし！」とは母さんの言葉だ。

「こんなもんか」

イベルタルはのそつと起き上がり、翼を畳んだ状態で、その辺のオレンのみをもいでもつもつと食べている。

元気になるのはやいなー、とは思ったものの、早くワールシティに行かないと思いつ出した。ニシキギ博士、午後はよくフィールドワークに出てるんだった。
と。

『ピユウー！』

聞き慣れた鳴き声が出た。ワルトの鳴き声だ。俺を探しているのだろう。

「それじゃあな。なんで墜落したかは知らないけど気をつけろよー」
そう言ってからイベルタルに背を向けて、ワルトの鳴き声の方へと向かう。

イベルタルがこちらをじっと見ていたことに、その時の俺は気が付かなかった。

フリーダム博士

『ワールシティ』と書かれた看板から2つ先の曲がり角を右。手前から3つ目の建物が、ニシキギポケモン研究所だ。

少しドキドキしつつ、インターホンを押す。反応はない。

「あつれ？ニシキギ博士ー！」

『ピユウー！』

声もかけてみても反応がない。首を傾げていると、近くを通りかかったおぼちゃんに話しかけられた。

「あんら、ニシキギ先生にご用なの？」

「あ、はい。ポケモンを貰いに……」

「あらあ！ニシキギ先生なら、ついさつき向こうの廃墟に出て行ったわよ？行ってみたらいいんじゃないかしら」

「うえっ?!ありがとうございますー！」

ちよつと遅かったかー！ニシキギ博士、ちよつと自由人な所があるからなあ。

とはいえ、向こうの廃墟……まちの北側にある病院の廃墟っぽいところだ。どうして廃墟になったかは知らない。

仕方がない、とりあえず向かうかあ。さつき森を抜けてきたばっかりなんだけどなー……。



ワルトも大丈夫そうだったので、廃墟の方まで来た。ちらほらとポケモンを探しに来たのであろうトレーナーの姿と、住み着いているバケツチャとムウマ、ヨマワルの姿が見える。真っ昼間なものもあって、別に不審なものはない。流石に建物内はヤバそうな雰囲気だけど。

さて、ニシキギ博士はどこだろう？近くにいたエリートトレーナーっぽい人に話しかけて聞いてみる。

「ニシキギ博士？それなら、向こうに行ってるのは見たけど？」

エリートトレーナーっぽい人は、奥の方を指さした。廃墟内というか、廃墟の中庭の方向だ。

確か、構造上、少しだけとは言えど建物内を通らないと中庭には出

られなかったはず。嫌だなあ。

とりあえずお礼を言つて、中庭の方に行くことにした。ワルトが不思議そうに、警戒するような表情をしていた気がするけど、きつと気の所為だと思ふことにした。

嫌だなあ、とは思ふものの、行くしかない。待つてても、ニシキギ博士つて数日出っぱなしの時もあるし……。

壊れた扉から中に入る。真つ昼間だと言うのに薄暗く、若干ムウマが漂っているのが見える以外は何もいない。

ワルトがいることを確認して、中庭に出るべく扉を探すことにした。



……のだけど。

「????」

また、迷い、ました――。

思った以上に構造が複雑だったし、ムウマからのイタズラもあつてなかなか進めず、そしてここはどこ状態になった。

なかなか外に出る通路も見つからず、真つ昼間だったのが夕方になつていた。どうして。

ワルトも呆れたようにため息をついた。さつきからイタズラしてこようとしてくるムウマをムーンフォースで追い払ってくれているので、感謝しかない。

案内看板はあつたものの、ボロボロになりすぎて判読できない。

と、顔を上げると目の前に階段があつた。下りはガレキで塞がれているものの、上りは使えそうだ。いちど屋上に出て、最悪そこから壁伝いに降りよう。

屋上に出る。いつの間にもやら空は夕陽に染まっついて、時間がとても経っている事が分かる。

フェンスに手をかけて、中庭を見下ろす。中央の草むらの中、ツインのアイスクリームのようなポケモンを連れた、フリーザーをちよつ

と模した白衣の人物の姿が見えた。ニシキギ博士だ。

「ニシキギ博士……お……い!!」

大声で中庭に向けて声をかける。何度かかけたところで、ニシキギ博士が振り返った。俺は大きく手を振る。

「、——!」

ニシキギ博士が何か叫んでいる。遠いからか、よく聞き取れない。

「どーしたんですか……!」

「——!」

分からない。だが、ニシキギ博士はなにやら指をさしている。よく耳をすます。

「!!——i——う、し、ろ!!!」

「……後ろ?」

『ビュウ!!!』

ワルトが鋭く鳴いた。疑問に思いつつ、振り向く。

真後ろには——ムウマとヨマワルの群れと、とヨノワール。

「——え?」

ドン、と軽い衝撃があつて、景色がぐらりと反転した。何故か、空が離れていく。

理解するのにすこしかかった。理由は分からないが、ヨノワールに屋上から突き落とされたようだった。ワルトが駆けつけようとして、ヨノワールに邪魔されて、ムーンフォースを撃っているのが見えた。

こういう時つて、やけに冷静でゆっくりに感じるんだな。ああ、15+数10年の出来事が思い出される……走馬灯つてやつなのかな……。

夕陽で朱に染まった空が離れていく。死ぬなら一瞬がいいなあ、とか呑気に考えてしまう。

ふと、そんな空の中に影が見えた。Yの字のような、紅く黒い影。

その影はみるみる近付いて来る。ここに来てビビった俺は、ぎゅつと目を瞑った。

すると、ふわりとした感覚に襲われた。

『ギユア』

鳴き声に、恐る恐る目を開けてみる。俺は何か、黒いものの上にいる。

周囲を確認、それから、俺が何の上にいるかを遅れて認識した。

「……イベルタル?!」

『ギユアア』

イベルタル?!イベルタルナンデ?!……いや、もしや、森で手当したから?んなわけ。

そのうちに、イベルタルは中庭へと降り立った。少し遅れて、ワルトもこちらへと来た。ニシキギ博士とバイバニラは、ポカーンとして硬直していた。

よく分からない空気を最初に破ったのは、ニシキギ博士だった。

「えーっと……その子、イベルタル、だよね?」

「あ、はい……」

◆◆

混乱しつつも、この経緯(?)をニシキギ博士に話した。すると、博士は面白そうに。

「あーっはっは!なるほど!それで、イベルタルが!」

「確定じゃないんですけどね……」

「いやーっはっはっは!大型新人ってやつだねー!」

ワルトとバイバニラが、どこか呆れたように目を伏せたのが見えた。イベルタルは大人しい様子で、こちらをじつと見ている。

「ま、そーゆーことね。完全に理解したよ。僕のとこにポケモン貰いに来たってわけなんだね」

「はい」

「それなんだけどねー……ポケモン、今居ないんだ!」

「はい?」

博士が言うには、「ちよーど、ポケモンみんな連れて出られちゃってね」とかなんとか。マジで?」

このままワルトを連れていく訳には行かないし、どうするべきか

……。

「どうしよう……」

そう考えこもうとしたとき、くいくいと袖を引かれた。イベルタルだ。じつとこちらを見ている。

「イベルタル……?」

「はーん、なるほどね。クリユザくん、今モンスターボールは持つてる?」

「モンスターボールですか?」一応……」

「OK、ひとつ出してみて?」

言われるがままに、ボールをひとつ取り出す。すると、イベルタルはすかさずボールに触れ、そのままゲットされてしまった。

「え?」

「どうということ?と俺が首を傾げると、ニシキギ博士は笑いながら頷いた。

「やっぱりね。事情は分からないけど、イベルタルはキミについて行くべく来てたんだよ。パートナーとして、連れてってあげたらどうだい?」

そんな小説の主人公みたいな。

ボールの中を覗くと、イベルタルは若干キラキラした目でこちらを見ている。あーもー!

「……うん、そうだな。よろしく、イベルタル」

『ギユアオ』

こうして、俺はパートナーをイベルタルとして旅を始めることとなった。

街を発つ

流石に遅いからと、ニシキギ博士の研究所に泊まって、夜が明けた。夜の間にも、ワルトは家へと飛んで帰った。

「さて！クリユザくん。これからキミはどこに向かう気なんだい？」

研究所の前、お礼も言っ行ってこうとしたら、ニシキギ博士からそう聞かれた。

どこに……実は特に、決めていなかった。

「強いて言うなら、色んな地方とか場所とかは行くつもりですね。イツシュとかジヨウトとか」

「なるほどねー。まあ、ジム巡りしてリーグに挑むにも、別地方に行くにも、まずはブラウシテイに行くべきだね。あそこなら、飛行機も船もあるからさ。……ほらこれ、あげるよ」

ニシキギ博士から、スマートフォンのような端末を貰った。

「これは？」
「ポケモン図鑑も兼ねる端末さ。ポケモン代わりの贈り物だと思ってね」

ぱちこん、と博士はウィンクした。

「泊めて貰うだけじゃなくて、図鑑まで、ありがとうございます」

「いいっていいって！あ、もしリーグに挑むんだったら、僕も待ってるからね？その時は本っ気で！相手するからねー」

「あはは……それでは」

そういえば、ニシキギ博士はポケモン博士であると同時にエナム地方の四天王の1人だったりするんだった。忘れがちになるけど、実力は本物だとかなんとか、いつか聞いた気がする。



さて、ワールシテイから出てどうろへ。ワールシテイにもジムがあるが、ゲーム的に言うなら5番目の街にあたる。ちなみにゴーストタイプ。最初に挑むようなところじゃねーですわよ。

しかし、最初のポケモンがイベルタル……大丈夫なのかな？いや、何がというわけじゃないけど、強いて言うなら、こう……俺の自制的な意味合いで。

まあ別に、悪の組織よろしく『世界征服！』とか『世界リセット！』とかは思わない。が、イキリ散らさないようにだけは気をつけないとね。

それはさておき、目下の問題がある。

「おい！いいからオレと勝負しろ！」

「ええ……」

たんぱんこぞうが しょうぶをしかけてきた！

目と目があったらポケモン勝負？そんなのゲームだけにしたい。通行人に無理矢理挑むとかはた迷惑でしてよ、奥様。

ボールの中のイベルタルに視線を向ける。イベルタルはどこことなく、『べつにいいけど』というような感じだった。

まあ、このたんぱんこぞうも相手しないと黙らなさそうだし、仕方がない。

「いいけど……」

「おっしや！センパイとしてボッコボコにしてやるからな!!いけつ！」

たんぱんこぞうは意気揚々と、バタフリーを繰り出した。多分、初エンカする相手としては高い方な気もするけど、バタフリー。進化レベルいくつだっけ。

「ほらはやく！おまえのポケモンも出せよ！」

「分かってるよ……イベルタル！」

『ギユアアオー！』

ボールをかざすと、赤い光とともにイベルタルが現れる。たんぱんこぞうはビビる様子を見せた。イベルタルのことは知らないらしい。が、強がるように。

「へっ、へーん？なかなか強そうじゃん？で、でも！オレのバタフリーには勝てねえぜ！『むしのさざめき』！」

バタフリーは指示に合わせ、翅を震わせてむしのエネルギーを乗せた音波を放つ。

確かに、バタフリーの技でもまあ、最適とは言わずとも適した解のひとつだろう。イベルタルはあく・ひこうタイプ。例えばイベルタルのタイプを知らなくとも、見た目からしてひこうとあくと考えられる。むし技なら、等倍で入る。ゲームじゃないんで変わるところはあるだろうけど、単純に考えるなら悪くは無い。

さて、こちらはどうか対応しよう。

間違いなく、デスウイングはやめた方がいい。アニメや映画を参考にするなら、絶対にヤバい。最終兵器とか言うレベルじゃない。

そうなるよ、良さそうな技……そうだ。

「イベルタル、『バークアウト』」

『ギュアアアオ!』

イベルタルに指示を飛ばせば、イベルタルは怒鳴りつけるように音波を放つ。それはむしのさざめきとせめぎあ……う事すらなく、一方的に押し返してバタフリーを吹き飛ばした。そのままバタフリーは、ぐるぐると目を回して気絶してしまった。

「は、はあ?!」

「……わあ」

圧倒的オーバーキル。たんぱんこぞうはバタフリーにかけより、キズぐすりを吹き掛けてから、ボールに戻した。

それから、俺が何とか言おうとする前にたんぱんこぞうは立ち上がり、ビシツと指をさしてきた。

「つつ、次は!!!そのでつけーの吹っ飛ばしてやるから!!!ボツコボツコにしてやる!覚えてろ!!!」

「え?あ、う、お、おう?」

そのままたんぱんこぞうは、ワールシティの方へと走っていった。

いやしかし、最初からイベルタルとか、中々どころかとんでもないオーバーキルでは?……考えても仕方ないか。

「とりあえず、お疲れ、イベルタル」

『……ギユア』

イベルタルをボールに戻そうとボールを取り出したが、イベルタルはむっとした。

「あー、えっと、ボールに戻りたくないのか？このままついてきたいのか？」

『ギユ』

おおう。某マサラ人の相棒……じゃないけれど、連れ歩き状態がいいのか。

目立つ気もするけど、まあいいか。イベルタルがそうしたいならそうしよう。

「仕方ないな。んじゃ、行こうか」

『ギユアア♪』

目指すはとりあえず、ブラウシテイ。確固たる目的がある訳では無いけど、まずはそこだ。